



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第14回

鳥にまつわる慣用句／諺を使った曲、生んだ曲

る「Last Lonely Eagle」という言い回しが、アメリカでは慣用句的に使われるようになったんだ。「最後の孤独な鷲」＝1羽しか残っていないので、絶滅の危機にある鷲。例えば、仲間内で一人だけ彼女がいない友人に対し、この言い回しを使ったりする。「You're the last lonely eagle man!」＝お前が最後の寂しい鷲だ！つまり、お前だけが絶滅の道を歩んでいるというわけだ。歌詞はこう始まる。▲川が曲がるあたりまで行くと、君はいろいろな変化に気づくだろう。そして、▲街の住人は夢を忘れて、髪の毛も切ってしまった。▲と続く。このレコードが発売された時期は、60年代に自然に戻って生活していた人たちが、そのコミュニケーションでの暮らしをやめて、街に戻ってきていた。多くの人が長い髪を切り、コミュニティがあった山から降りてきて、一般社会に復帰した時代だった。



The Police "Zenyatta Mondatta" A&M [UK] ● AMLH64831 [1980] → A&M ● UICY25087 incl. 'Canary In A Coalmine'

孤独な鷲の宿命に涙しよう。彼はもう二度と舞い降りることはない。作者のジョン・ドースンは、この孤独な少年＝鷲に譬えて、滅びゆくヒッピー文化を称え、その衰退を惜しんでいる。 ● ポリスが80年にリリースした『ゼニヤッタ・モンダッタ』は、「高校教師」「ドウドウ・ドウドウ・デ・ダダ」という2曲のスーパー・ヒットを生んだ。その大ヒット・アルバムの4曲目「カナリアの悲劇」の英語タイトルは、「Canary In A Coalmine」という諺だ。直訳すると、炭鉱のカナリア。これは、もともとは炭坑で使う言い回しだ。昔は鉱山労働者が山に入るとき、カゴに入れたカナリアを持って行くのが常だった。もし坑道にメタンや一酸化炭素のような危険なガスが充満したとき、それがいち早く分かるようにするためだ。ガスが漏れると、

いつも鳴いているカナリヤが死んで鳴き声がしなくなるからね。鉱山労働者がすぐに脱出できるように、カナリアが尊い犠牲になるわけだ。 作曲したステイングは、この諺を使って知り合いを皮肉っている。炭鉱の中にいるカナリアみたいに怯えているんじゃない。カナリアみたいに生きていたらダメだ、と歌っている。1行目は▲君は周りの雰囲気の良いと倒れてしまう。セカンド・ヴァースでも、▲フィレンツェで冬を過ごしたいけど、インフルエンザにかかるのを怖がっている。コーラスは▲炭鉱の中にいるカナリア。そしてサード・ヴァースでも、▲君は妄想に苦しんでいる。精神科医に金を払っても、何も変わらないよ。曲調が明るいから救われるが、一体、誰に当たったメッセージなんだろうか。 ● 次は、あの「ポーク・サラダ・アニー」(2014年7月号参照)で有名なアーティスト・トニー・ジョー・ホワイトが72年に出した『ザ・トレイン・アイム・オン』の中の1曲「アズ・ザ・クロウ・フライズ」。彼は本物のスワンプ・ミュージシャンだ。彼はルイジアナで生まれ、その世界のことをよ

慣用句や諺の中には、音楽から生まれたものもある。

先週、事務所を片づけている時、昔よくかぶっていたカウボーイ・ハットが出てきた。レジストロールというブランドの5Xフェルトの帽子。5Xは素材のなかに使用されているビーヴァーの毛の割合を表わす。ビーヴァーの毛は水をはじくので多く使うほど高級とされ、その割合でハットの品質が決められる。最高級は20Xで、安ものは1X、中にはXがないものもある。カウボーイ・ハットはアメリカでかぶる分には少しも変じやないが、日本ではちよつと目立ちすぎて恥ずかしい。一番の問題は、レストランに入っても、帽子をかける場所がないことだ(苦笑)。

俺はそのレジストロールの帽子をかぶって、片手でビールを持ちながら夕陽を見れば、きつとカントリーが聴きたくなると思つたが、実際にやってみたら、なぜかしらニュー・ライダーズ・オブ・ザ・パープル・セイジの曲を耳にしたくなった。彼らはヒッピーなのに、カウボーイ・ハットをかぶってカントリーを歌うバンドだ。71年のデビュー・アルバムをCDプレイヤーに入れ、「最後の孤独な鷲 (Last Lonely Eagle)」



New Riders Of The Purple Sage "New Riders Of The Purple Sage" Columbia ● C30888 [1971] © Legacy/Columbia [US] © CK85388 incl. 'Last Lonely Eagle'

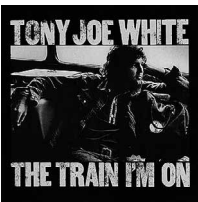
のシングルだが心を打つメッセージに耳を傾けた。

このデビュー・アルバムのときのニュー・ライダーズ・オブ・ザ・パープル・セイジのメンバーは、グレイトフル・デッドのジェリー・ガルシア(g, sg, バンジョー)、ジョン・ドースン(g, vo)、デイヴィッド・ネルスン(g, vo)、デイヴ・トールバート(b, g, vo)、そしてグレイトフル・デッドのミック・ハートと元ジェファースン・エアプレインのスペンサー・ドライデンがドラムを担当、さらにコマンダー・コデーがピアノを弾いていた。ジェリー・ガルシアとミック・ハートがいるので、グレイトフル・デッドのファンならニュー・ライダーズ・オブ・ザ・パープル・セイジのレコードは誰でも持っているんだ。

ここで紹介する「最後の孤独な鷲」は、曲のタイトルで歌詞の中でも何度も出てく

く歌っていた。この曲はアメリカでよく使われる慣用句 'As The Crow Flies' をタイトルにした曲だ。直訳すると、＼カラスが飛ぶように＼。カラスが飛ぶ、まっすぐな距離を指している。例えば、東京から鎌倉までは道が曲がっているので車でまっすぐに行けないが、カラスが飛ぶ距離は一直線だから、もっと近い。アメリカでも高速度ができる前の道路は皆グニャグニャ曲がっていたから、空を飛ぶより、距離が長くなる。

トニーの歌詞はシンプルだ。1行目から、'As the crow flies baby, Well I ain't too far from you' = カラスが飛ぶように僕はあなたからそれほど遠くはないんだ。'But since I don't have wings, Well I can't get home as fast as I want to' = でも羽がないから、自分が行きたい速さで家に着けないんだ。カラスのように一直線の



Tony Joe White
"The Train I'm On"
Warner Bros. [US] ●BS2580
[1972] ◆Sepia Tone [US]
©STONE04

incl. 'As The Crow Flies'

で、'Birds of a feather, we should be together like birds of a feather' = 類は友を呼ぶ、だから僕らは一緒にいなぎや、と歌われる。セカンド・ヴァースでは、君にも僕にも友達があまりいなかった、だからみんなが遊ぶゲームにも入れてもらえなかったけれども、周りの人たちが言っていたよ。あの二人は 'Birds Of A Feather' なんだと。サード・ヴァースでは、'Your folks didn't want me hang in' round' = 君の親は僕が君と一緒にいるのを嫌がっていたね。でも、僕たちは 'Birds Of A Feather' なんだから、これから一緒にいるべきだ。歌詞の途中で、'You and me habe' とあるので、曲の主人公の相手が女性だと分かる。幼馴染の女性なんだろう。なぜか分からないが、ジョー・サウスもトニー・ジョー・ホワイトも含め、南部のスワンプの人たちには大きな名もみあげがある。もしかしたら、エルヴィス・プレスリーの影響かもしれない。

最後はレナード・コーエンの『電線の鳥 (Bird On The Wire)』だ。この曲は彼が69年に出した2枚目のアルバム『心とり、部屋に歌う (Songs From A Room)』の

距離を飛んで帰りたい。ある夜、夢の中に出てきた愛する女性が、自分の名前を呼んでいたことに虫の知らせを感じたこの曲の主人公が、帰路の列車の中で抱く焦燥をうまく描いている。もしかしたら、この曲は同じアルバムに収録されている「ザ・トレイン・アイム・オン」の後日譚なのかもしれない。

● 次も南部のミュージシャンのひとり、ジョー・サウスだ。「バーズ・オブ・ア・フエザー」は68年の彼のデビュー・アルバム『イントロスペクト』からのシングルだ。全米チャートの106位となったが、アルバムからのセカンド・シングル「ゲームズ・ピープル・プレイ」が69年に12位のヒットを記録するとリイシューされ96位を記録した。「孤独の影 (Games People Play)」のヒットにより同名のアルバムが69年にリリースされ、その中には「バーズ・オブ・ア・フエザー」を含む『イントロスペクト』からの3曲が再収録された。ちなみに、「孤独の影」は70年のグラミー賞ソング・オブ・ザ・イヤーとベスト・コンテンポラリー・ソング部門を受賞した。ジョー・サウスはジョージア州のアトラ

1曲目だ。「Bird On The Wire」はレナード・コーエンが曲にするまで、慣用句にはなっていなかったと思う。この曲は部屋の前に張られた電線にとまっていた鳥を見て書いたそうだ。電線にとまった鳥のように、ギリギリの状態をさしている。歌詞もレナードらしく、不可解だ。電線にとまっていた鳥や、真夜中の酔っぱらいの合唱団みたいに、俺は自由に生きようとしてきたという。いくつか彼の歌詞を並べてみよう。
'Like a worm on a hook' = 釣り針に刺さったミミズみたいに。ちょっと恐ろしいイメージだ。'Like a baby stillborn, like a beast with his horn, I have torn everyone who reached out to me' = 死産の赤ちゃんみたいに、獣の角みたいに、俺は俺に手を貸してくれた人に傷をつけてしまった。'I saw a beggar leaning on his wooden crutch' = 木の杖に寄りかかって



Leonard Cohen
"Songs From A Room"
Columbia [US] ●CS9767
[1969] ◆Legacy/Columbia
[EU] 88697961772-2

incl. 'Bird On The Wire'



Joe South
"Introspect"
Capitol [US] ●OST108 [1968]
incl. 'Birds Of A Feather'

ンタ生まれ。トニー・ジョー・ホワイトと同じスワンプ音楽を代表するアーティストのひとりだ。もともとはセッションマンとして活動し、ボブ・ディラン、アリサ・ランクリン、サイモン＆ガーファングルのレコーディングに参加した。その後、ジョーは60年代からソングライターとして活動を始めた。デュープ・パープルのヒット曲「ハッシュ」、ビリー・ジョー・ロイアルの「ダウン・イン・ザ・ブロードックス」、リン・アンダーソンのヒット曲「ローズ・ガーデン」も彼の曲だ。

'Birds Of A Feather' も英語の諺で、同じ羽の鳥、つまり、類は友を呼ぶ、という意味だ。他人は僕らのことを分かってくれないが、僕らは同じタイプだからいつも一緒にいられる。ファースト・ヴァースでは、子供のころに僕らはよく一緒に遊んだね、仲が良かったよと歌う。次にコーラス

いるホームレスを見かけた。彼が俺にこう言った。'You must not ask for so much' = そんなに望んではいけませんよ。その次に、'And a pretty woman leaning in her darkened door' = 暗いドアの寄りかかっているきれいな女性が俺に泣いてきた。だから、電線にとまった鳥みたいに、酔っぱらいの真夜中の合唱団みたいに、俺は自分なりに自由に生きようとしてきた。これはバランスをとろうとしているんだけど、なかなかうまくいかないという意味だ。'you are living your life like a bird on the wire'。きみはギリギリのところで生きている。そんなニュアンスだ。つまり、人生を自由に生きる中で、電線にとまった鳥のようにギリギリのバランスをとろうとしても、知らないうちに人を傷つけているということなんだ。

最初は鳥がテーマの曲を集めていたつもりだったが、知らないうちに慣用句や諺絡みの曲を集めたようだ。こうやって言葉は時代を超えて生きていく。こうやって、新しい言葉が俺たちの世界や言葉に入ってくるんだと改めて思った。